i・report
No.486
一関出張所
一関市狐禅寺字石ノ瀬155-81
Tel：0191-23-2435
Fax：0191-23-6841
ichinoseki report 2020.9.17

◆一関出張所管内を流れる東北地方で一番大きい北上川は、平泉文化が栄えた背景に深く関わっていたことをシリーズ化してご紹介しています。

北上川と共に生きた平泉文化　第8弾

―平泉文化を支えた母なる川・北上川―

北上川が運んだもの　パート1

物資輸送の大動脈として平泉の繁栄を支えた北上川

奥州藤原氏の資金源　金と馬

奈良で東大寺の大仏が造られていた頃（745年制作開始～752年完成）、朝廷が探し求めていた待望の金が、日本で初めて陸奥国で産出されました。

日本初の金の産出以来、陸奥国の歴史は常に金と共にありました。平安時代の陸奥国は、国内で有数の金産出国で、奥州藤原氏はこの豊富な金で大きな力と富を得ました。

みちのくは、優れた馬の産地でもありました。馬は当時の戦いで重要な役割を担っており、朝廷をはじめ、各地の武士たちもみちのくの馬が優秀だとわかると、その馬を手に入れようとしました。

奥州藤原氏は、金と馬を朝廷に献ずることで、長期間にわたってみちのくを、朝廷に干渉されない『半独立国』のように支配しました。金と馬は、藤原氏の経済力のみならず、政治力も支えていたのです。

京都への産物

みちのくの三大特産物

砂　金

京都で仏像などの装飾に使われたほか、中国にも輸出されていました。

馬

特に、糠部（現在の青森県東部から岩手県北部）の足のはやい馬が有名でした。

鷲の羽

弓矢に使われたり、武官の正式な装束でも矢を帯びることになっていたため、需要がありました。

さらに、蝦夷ヶ島（現在の北海道）との交易で手に入れた、耐水性があり馬具などに使われた、アザラシの皮も、平泉経由で京都に運ばれました。

二代基衡は、毛越寺の仏像の制作を、京都の仏師に依頼しました。その報酬として、砂金100両、駿馬50頭、鷲の羽100尻、アザラシの皮60余枚、絹、山海珍味を贈ったそうです。さらに特別報酬として、生美絹（※すずしのきぬ）を船三艘で贈ったところ、仏師は嬉しさのあまり冗談まじりに「生美絹より、練絹（※ねりきぬ）が欲しかった」と言い、それを聞いた基衡は、新たに練絹を船三艘に積んで贈ったと伝えられています。

※生美絹・・・
精練（生糸のノリ状のものを取り除くこと）がされていない絹織物

※練絹・・・
精練された絹織物

※北上川学習交流館　あいぽーと展示資料より

※バックナンバーはこちら　http://www.thr.mlit.go.jp/iwate/syuttyoujyo/itinoseki/2020/2020_ichinoseki.htm
第1弾　NO.467　第2弾　NO.468　第3弾　NO.470　第4弾　NO.478　第5弾　NO.479　第6弾　NO.480
第7弾　NO.482

編集後記
一関遊水地内も、稲穂の頭がたれて薄らと金色に色づき始めました。残暑が厳しい日が続きましたが、着々と秋に近づいています♪この先、季節の変わり目は体調を崩しやすくなりますので、気をつけましょう✿(や)